

特殊モーラの分節構造と安定度*

那 須 昭 夫

1. はじめに

撥音・促音・長音・二重母音¹⁾の四つの音韻要素は「特殊モーラ」として一括して扱われるのが通例であるが、近年、これらが必ずしも均質な性格を持つとは限らないことが各所で指摘されている。たとえば歌謡でのリズムの与え方や言い間違いのパターン、あるいはアクセント形成における特殊モーラの振る舞いといった種々の韻律現象の分析を通じて、特殊モーラの間に階層的な下位分類が成り立つことが見出されている (Kubozono 1985; Vance 1987; 窪蘭 1992, 1999; 氏平1996; 田中1998, 2000, 2007, 2008; 杉藤・坂井1999)。特殊モーラの下位分類を論じた諸研究においてしばしば示されるのは、特殊モーラ全体が母音性のグループ (長音/R/・二重母音/J/) と子音性のグループ (促音/Q/・撥音/N/) とに大別できるとする見方である。

(1) {J, R} : {N, Q}

このグループ化は音声特徴の面から見ても自然なものであり、かつ、音韻論的な振る舞いに照らしても、たとえば上野 (1984) や窪蘭 (1999) が見出した自立性階層 ($J > R > N > Q$) に見るように、一定の合理性を伴った分類である²⁾。

その一方で、次のような組み合わせが成り立つ可能性については、従来必ずしも積極的に論じられてきたわけではない³⁾。

(2) {N, J} : {R, Q}

こちら分類は(1)に示した分類の構成素を一組だけ入れ替えたものに等しいが、(1)に比べると各グループ内での構成素どうしの音声的・音韻的共通性をすんなり見出すのは難しい。母音性の特殊モーラと子音性の特殊モーラがそれぞれ

の下位グループにおいて混在している点で、(1)に比べるとやや込み入った組み合わせだと言える。

しかしながら、数ある音韻現象の中には(2)の分類の可能性を示唆するものが少なからず見られる。たとえば(3)に示すように、複合外来語の短縮過程においては長音や促音の脱落するパターンが比較的多く見出されるのに対して、撥音や二重母音が脱落するパターンはごく稀である(那須2005, 2008)。短縮語中に編入されるか否かという一点において、編入されやすい類(撥音・二重母音)とされにくい類(長音・促音)の違いが、まさしく(2)の分類と平行的な関係を見せている。

(3) a. 長音・促音

ポスト+ペット > ポスぺ (*ポスペッ)

テレホン+カード > テレカ (*テレカー)

b. 撥音・二重母音

マザー+コンプレックス > *マザコ (マザコン)

プラス+マイナス > *プラマ (プラマイ)

本稿では、(2)に示した下位分類が特殊モーラ間に成り立つ可能性について検討し、この分類において一方のグループをなす撥音と二重母音が、共通の構造特性を有する自然類として位置づけられることを論じる。撥音と二重母音は一見したところ互いに類似性に乏しい音韻要素であるように思われるが、ともにモーラ節点と分節要素との間に独占的な連結関係を構成する点においては、類似した特徴を共有している。本稿ではまず2節・3節において、構造的観点から撥音と二重母音の親近性を論じる。続いて本稿後半の4節・5節では、(2)の分類を反映する韻律現象を二つ取り上げ、特殊モーラの安定度という観点から分析する。この安定度という概念は、窪蘭(1999)が言い間違い現象(代入エラー)の観察を通じて既に提唱しているものだが、本稿ではその主張に疑義を呈すべき点があることを指摘した上で、安定度の差が特殊モーラ間の構造特性の差異に由来するものであることを主張する。

2. 先行研究 ー自立性と安定度ー

特殊モーラ間の性質の差を捉える観点としては、従来、「自立性」と「安定

度」という二通りの尺度が提案されている。

「自立性」とは、特殊モーラ間の相対的な自立度の差に目を向けた概念である。特殊モーラの中には自立モーラと対等の自立性を持ちやすいものとそうでないものがあるとの見方で、上野（1984）は諸方言における特殊モーラへのアクセント付与のあり方を検討する中で、モーラ音素が核を担い得る序列として次の階層の存在を示唆している。

(4) 自立性階層

$$J > R > N > Q$$

自立性の階層(4)については、その後もアクセント現象およびリズム現象の分析を通じてさらに発展的な検討が重ねられてきた（Vance 1987；窪 蘭 1992, 1999；田中2007, 2008）。とりわけ窪 蘭（1999）および田中（2007, 2008）では、(4)の階層が分節のソノリティの差に還元できるとの一般化が示されている。すなわち、母音性の特殊モーラ（J, R）が子音性（N, Q）の特殊モーラよりも自立しやすいのは、母音と子音の間に見られる一般的なソノリティの差から見てごく自然な帰結であるとの見解である。

一方「安定度」とは、連続する分節間でのソノリティの差に基づいて各特殊モーラの性質の相違を捉える概念である。窪 蘭（1999）の言を借りるならば、自立性が「撥音対促音というように一つの音と別の音との選択的（paradigmatic）な関係を示す」ものであるのに対し、安定度は「同じ音節内で隣接する音（たとえば母音とその直後の要素）の間の聞こえ度の差を表す」ものであり、分節音どうしの「連立的（syntagmatic）な関係」を示す概念である点で、自立性の尺度とは異なるとされる。窪 蘭は言い間違いのパターンの分析を通じて、特殊モーラ間の安定度の差について次の階層の可能性を示唆している⁴。

(5) 安定度階層

$$N > J > R > Q$$

この階層は、一つの音節内での分節の安定度の違いを示している。窪 蘭によれば、特殊モーラ X を含む重音節 CVX では VX 間のソノリティの差が大きいほど X の安定度も増すとされる。

上に示した二つのうち、本稿では安定度の階層(5)に基づく特殊モーラの分類の可能性について検討する。安定度の階層では、子音性の特殊モーラである撥音・促音が階層の両極に乖離しているのが特徴である。母音性・子音性の特殊モーラがきれいに二分される自立性の階層(4)に比べると、安定度の階層は幾分複雑な組成をなしていると言える。ここで素朴に疑問に思われるのは、なぜ子音性の特殊モーラである撥音が二つの母音性の特殊モーラ(二重母音・長音)を凌駕して高い安定度を示すのかということである。また、階層(5)の上位にある「N>J」の序列部分は、安定度という尺度から見た場合に撥音と二重母音の性格が近似していることを示唆するものであるが、子音である撥音と母音である二重母音とが近似の関係にあるとは、俄かには首肯しがたいように思われる。一体いかなる点において両者が近似の類をなすと言えるのかという疑問が残る。

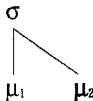
これらの疑問に答えを与えるには、まずは安定度という概念そのものに対し、再度新たな視点から検討を加える必要がある。安定度がいかなる根拠に基づく概念なのかを検討することによって、(5)の階層における撥音の位置づけの背景および、撥音と二重母音の近似性の裏づけが明らかになると考えられる。

3. 音韻構造と安定度

3.1 特殊モーラの音韻構造

特殊モーラとは、一般的に言えば、重音節の第二モーラの位置を占める音韻要素にはかならない。重音節の一般構造は(6)のように示せるが、この構造において「 μ_2 」と示した韻律節点が特殊モーラの所在である。

(6) 重音節と特殊モーラ

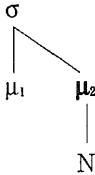


μ_2 節点はあくまでも韻律構造の一部に過ぎず、これが具体的な音価を伴って出力されるためには、何らかの分節がこれに連結しなければならない。 μ_2 節点の実体化するには分節構造による支えが不可欠なのである⁵。この点について四つの特殊モーラの音韻構造をそれぞれ見てみたい。

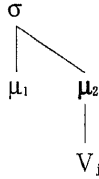
まず撥音は、 μ_2 節点に鼻音性の指定を備えた分節Nが連結することによって実現する⁶。同様に二重母音も、 μ_2 節点に分節 V_j が連結することでその実体が決まる⁷。撥音・二重母音の音韻構造はそれぞれ (7a) (7b) のように示せる。

(7) 分節要素の連結

a. 撥音



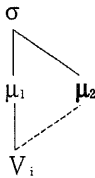
b. 二重母音



撥音と二重母音に共通するのは、いずれも固有の分節要素 (N, V_j) が μ_2 節点に独占的に連結することである。

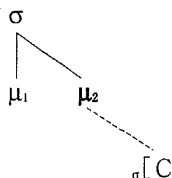
これに対して長音と促音では、 μ_2 節点が固有の分節要素によってではなく、隣接する要素から音価を借りる形で満たされるという特徴がある。まず長音の構造では、 μ_2 の直前の節点 (μ_1) に連結している核母音 V_i からその音色が拡張することによって μ_2 節点が満たされる。

(8) 長音



μ_2 節点を埋めている V_i はもと μ_1 に属する分節であるため、 μ_2 節点のみに固有に属する分節であるとは言えない。同様に促音においてもこうした共有連結構造が見られるが、促音の場合、 μ_2 節点を満たす分節要素はもはや同一音節内には存在せず、後続音節頭子音の左方拡張がなければ μ_2 節点は満たされない。

(9) 促音



このように、特殊モーラの中には μ_2 節点が固有の分節音によって満たされるものとそうでないものがある。この違いに基づく、日本語の四つの特殊モーラは大きく次の二つのグループに分けることができる。

(10) {N, J} : {R, Q}

注目すべきは、この分類が特殊モーラの「安定度」の尺度(5)と整合する一面を有していることである。すなわち、固有の分節要素が μ_2 節点に独占的に付帯する特殊モーラほど安定度の階層の上位を占め (N, J)、逆に、固有の分節を持たない特殊モーラほど安定度の階層の下位に位置している (R, Q)。このことは、特殊モーラの「安定度」という尺度が、固有分節の有無といった構造上の特性を通じて定義できる可能性を色濃く示唆している。

3.2 「安定度」と「聞こえ度」

窪菌 (1999) によれば、特殊モーラの安定度とは、分節音の「聞こえ度」の差によって定義されるものと考えられている。窪菌は安定度の尺度を「同じ音節内で隣接する音 (たとえば母音とその直後の要素) の間の聞こえ度の差を表すもの」とであると位置づけ、聞こえ度の落差と安定度との関係について「一般に、音連続・音節の安定度は聞こえ度と相関し、その差が小さい音連続を含む音節は忌避される傾向がある」とする。その上で、重音節 CVX における V~X 間の聞こえ度の差の階層 (CVN > CVJ > CVV) が安定度の尺度(5)に一致することを指摘している。

しかしながら、聞こえ度との平行性を根拠に安定度の定義を求める主張には、次の点において不可解な部分が残る。

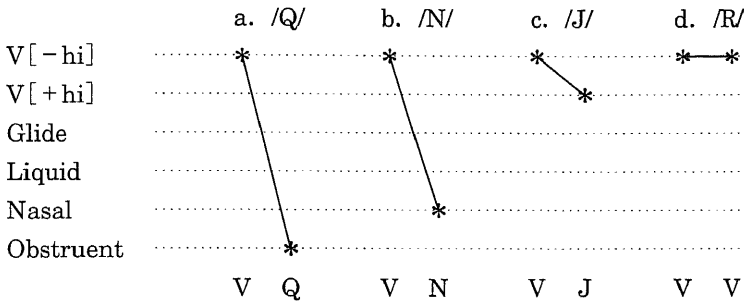
仮に、安定度の階層が音節 CVX 内の要素 V~X 間の聞こえ度の差と平行的なものであるとすると、核母音 V との間で聞こえ度の落差が最も大きいのは

促音であるため、安定度の階層もこれに対応して次のような序列をなして然るべきである。

(11) $Q > N > J > R$

促音とは音節末に位置する阻害音にはかならず、阻害音は聞こえ度の階層において最低位に位置づけられる分節である (Selkirk 1984ほか)。したがって、同一音節内で先行する核母音との聞こえの落差という点から見ると、(12)に図示するように「母音+促音」(VQ) という構造こそが実は最も大きな落差を抱えた連鎖に相当することになる*。

(12) 聞こえ度の差



しかるに(5)では促音はむしろ階層の最下位に位置づけられる。音節核母音との聞こえ度の差が最も著しいにもかかわらず、促音に関してはなぜかその事実が安定度階層における位置づけに反映されない。促音に限ってはその安定度を測るにあたって「聞こえ度の差」という基準が通用しないのである。

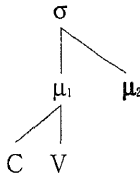
3.3 分節面の存在感

では、こうした促音の特異性をも包摂し得る形で「安定度」の尺度の根拠を見出すには、特殊モーラのどのような側面に目を向けたらよいだろうか。先に3.1節において、特殊モーラには固有の分節音を有するタイプ（撥音・二重母音）とそうでないタイプ（長音・促音）とがあることを見たが、上述の問題に答えを与えるには、まさしくこうした構造上の差異が大きなヒントになる。

四種類の特殊モーラのうち、促音だけは同一音節内に μ 節点を満たす分節

を全く持たない点の特異である。促音節の μ_2 節点はその直後の音節の頭子音からの拡張作用を経て実体化されるものの、当該音節内に限ってみれば、 μ_2 節点の実体化を支える分節は一切存在しない。

(13) 促音節



促音の特異性の正体を求めるならばまさにこの点であろう。促音では μ_2 節点の実体化を支える分節が音節内に全く存在しないために、他の特殊モーラに比べて分節としてのいわば「存在感」が著しく乏しいのである。

分節面での存在感の乏しさという点では長音も似たようなところがある。長音も、リズムとしてのモーラ (μ_2) は有していてもその分節上の実体は先行する核母音のそれと同じであることから、分節面での固有性に乏しい特殊モーラである。このため音韻環境によっては簡単に脱落してしまうこともある。語末長母音の短音化(14)がそれで、この現象では音節核母音の音色を残したまま長音のモーラが失われる(助川・前川・上原1999; 窪蘭2000)。

(14) 語末長母音短音化 (「-」はモーラ境界)

ho-N-to-o	>	ho-N-to	(本当)
tyo-o-tyo-o	>	tyo-o-tyo	(蝶々)
nyo-o-bo-o	>	nyo-o-bo	(女房)
a-i-so-o	>	a-i-so	(愛想)
na-i-syo-o	>	na-i-syo	(内証 (内緒))

(窪蘭2000)

翻って、撥音や二重母音は同様の環境で失われることはない。たとえば「学問、学会」の語末の撥音・二重母音が脱落して「*ガクモ、*ガッカ」といった語形に変わることはまずあり得ない。長音・促音とは異なり、撥音・二重母音は μ_2 節点に固有の対応分節を有する特殊モーラであり、そのモーラが失われるということは、単に μ_2 節点が消滅することを意味するのみならず、それ

に付属する分節要素の消失をも直ちに意味する。

3.4 まとめ

以上検討したように、特殊モーラ間の「安定度」の差には、それぞれの特殊モーラの音韻構造の差異が深く関わっている。 μ_2 節点と分節要素との間に独占的な連結関係が成立する特殊モーラ（撥音・二重母音）ほど安定度が高く、反対に、間接的な連結関係によってしか μ_2 節点が満たされない特殊モーラ（長音・促音）では相対的に安定度が低下する。先に促音の問題を通じて検討したように、安定度の尺度を分節間の聞こえ度の差異だけで定義することは難しい。聞こえ度に加え、特殊モーラの所在である μ_2 節点が固有の分節を有しているか否かといった構造的な観点から各特殊モーラの差異を炙り出すことにより、安定度の尺度についてより合理的な根拠を与えることができる。

上述の知見を踏まえて、次節以降では特殊モーラの安定度の差が実際の音韻現象に反映されていることを見る。先に(10)において、安定度の尺度に基づいて特殊モーラが「撥音・二重母音」のグループと「長音・促音」のグループとに二分されるとの考えを示したが、次節以降では、この分類が音韻現象の分析に際しても有効であることを見る。

4. 複合外来語由来短縮語

4.1 原則と変則

特殊モーラの安定度の差異を反映した現象の第一として、この節では外来語複合形式の短縮現象（複合外来語由来短縮語）を取り上げる。この現象については那須（2005）にまとまった分析があるので、まずはそれに基づいて現象の概要を把握する。

複合外来語由来短縮語（以下、「短縮語」）とは、複合形式からなる外来語の一部を切り取ることによって作り出される次のようなパターンを言う。

(15) 複合外来語由来短縮語

<u>デジタル</u> + <u>カメラ</u>	>	デジカメ
<u>ドラゴン</u> + <u>クエスト</u>	>	ドラクエ
<u>セクシャル</u> + <u>ハラズメント</u>	>	セクハラ
<u>ファミリー</u> + <u>レストラン</u>	>	ファミレス

グルメ+ナビゲーション > グルナビ

この過程では、元の語を形作るそれぞれの構成素の語頭から順次二モーラずつの切り取りが起こり、全体で「2+2」モーラからなる語形が作られる。

ところが、短縮語の中にはこの原則に従わないパターン（変則形）も少なからず見られる。(16)に挙げるのがその一例である。

(16) 変則形

a. 1 + 2

メール+アドレス > メアド

セックス+フレンド > セフレ

b. 2 + 1

フリー+マーケット > フリマ

ポスト+ペット > ポスペ

これらの語では構成素の第二モーラが短縮語中に組み込まれずに脱落してしまう。(16a)では前部要素の第二モーラが、(16b)では後部要素の第二モーラが脱落しており、それぞれ「1+2」「2+1」モーラからなるアンバランスな構造が作られている。

こうした変則形では、脱落するモーラのタイプに一定の傾向が見られる。長音・促音の脱落するパターンが圧倒的に多い一方で、撥音や二重母音が脱落するパターンは数少ない(窪園2002)。360語の短縮語を調べた那須(2008)によると、特殊モーラ別の変則発生頻度は次の通りである。

(17) 変則発生頻度

	変則形	(全体)	割合
/Q/	35	(42)	83.3%
/R/	63	(121)	52.1%
/J/	10	(44)	22.7%
/N/	0	(313)	0.0%

短縮の過程で脱落してしまう割合は促音が83.3%と圧倒的に高く、次いで長音の52.1%と続く。促音を含む外来語ではその8割が短縮過程で促音を落として

いることになり、長音の場合には約半数において脱落が認められたことになる。その一方で、二重母音が落ちる割合は22.7%と低下し、撥音に至っては、脱落する例は全く見られない。

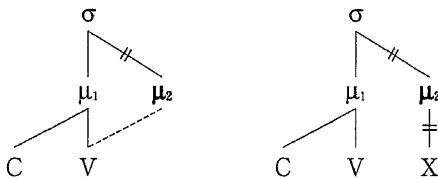
4.2 脱落傾向と安定度

上述の脱落傾向をめぐって興味深いのは、特殊モーラの「安定度」の尺度との間に明らかな対応関係が見出されることである。変則発生頻度(17)の多寡に基づいて特殊モーラ間の序列を示すと(18)が得られるが、この序列を逆方向から辿ると、そのまま安定度の序列(5)と一致することが分かる。

$$(18) \quad Q(83.3\%) > R(52.1\%) > J(22.7\%) > N(0.0\%)$$

このことは、特殊モーラの脱落が安定度と深く相関する現象であることを示唆して余りある。那須(2005)は、短縮語形成における特殊モーラの脱落の可否が、分節構造の保持／消失の違いを動機としているとの分析を示している。たとえば長音を含む構造では、仮にその脱落によってモーラ節点(μ_2)が失われたとしても全体の分節構造(CV)自体は一切影響を受けない(=19a)。その一方で撥音や二重母音を含む構造では、モーラ節点(μ_2)の脱落はとりもなおさずそれに付随する分節Xの消失をも意味する(=19b)。

$$(19) \quad \text{a. CV:} > \text{CV} \qquad \text{b. CVX} > \text{CV}$$



つまり、 μ_2 節点がもともと固有の分節要素を持たない長音では μ_2 が脱落したところで分節構造には全く影響が出ないが、 μ_2 節点に対して固有の分節要素が独占的に連結している撥音・二重母音では、 μ_2 の脱落に伴って分節構造の消失までもが必然的にもたらされてしまうのである。

こうした特徴の差異から窺えるのは、短縮現象というものが基本的にはプロソディックな現象でありながらも、もう一面では分節音の存否に関しても極め

て敏感な現象だということである。短縮は「2 + 2」モーラという韻律面でのターゲット・フレームを目指しながらも、一方では短縮の元になる構成素の分節構造を極力残す形で生じている。この点を物語る現象として、短縮元の形態に含まれる第三モーラが短縮語中に編入される次のようなパターン（補完形）を挙げることができる。

(20) 補完形

<u>メー</u> ル + アドレス	>	メルアド
<u>ネッ</u> ト + ラジオ	>	ネトラジ
ミニ + <u>モー</u> <u>ニ</u> ング (娘)	>	ミニモニ
アメリカン + <u>フッ</u> <u>ト</u> ボール	>	アメフト

このパターンでは、構成素第二モーラである長音や促音を単純に脱落させるのではなく、代わりに第三モーラが短縮語中に組み込まれることにより、「2 + 2」モーラからなるサイズが補償されるのが特徴である。注目すべきは、補完形において新たに編入されるモーラが自立モーラだという点である。自立モーラにはそれを支える分節（CV）が必ず付帯する。したがって、長音や促音の代わりに自立モーラが短縮語中に編入されるということは、分節構造を十全に備えたモーラを短縮語中に積極的に作り出すことにほかならない。

こうした自立モーラの特徴、すなわち固有の分節が必ず付帯するという点に照らすと、特殊モーラの中でも撥音や二重母音には、実は自立モーラと極めて近い性質が備わっていることに気づく。自立モーラに CV 分節構造が必ず付帯するのと同様に、撥音や二重母音にもそれぞれ N・J といった分節が固有に付帯するからである。また、短縮の過程で脱落しにくいという点でも三者には共通性が見られる。この点を別の角度から捉えなおすと、撥音や二重母音が短縮の過程で脱落しにくいのは、これらの特殊モーラがある意味で自立モーラ相当の存在感を有しているからだと言える。撥音・二重母音は特殊モーラではあっても、固有の分節によってその音韻的実体を支えられている点において、自立モーラにより近い性質を持っているのである。

5. LHL 型外来語の平板アクセント

5.1 平板型生成条件

続いて、この節では特殊モーラの安定度の差が外来語アクセントの型の違い

にも影響を及ぼしていることを見る。

外来語の中には、一定の音韻条件が整うと平板型アクセントが顕著に多く現れる一類がある。4 モーラからなる外来語がそれで、Kubozono (1996) によれば4 モーラ外来語では次の条件が伴うと平板型の現れる率が高くなるという。

(21) 平板型生成条件 (…LL 型)

- a. 語が軽音節の連鎖 (LL) で終わること。
- b. 語末母音が挿入母音/u/ではないこと。

この条件に当てはまるのは LLLL 型 (ヨセミテ, アラスカなど) と HLL 型 (モンタナ, マイアミなど) の4 モーラ外来語で、窪田・太田 (1998) で示された統計によれば、この二つの音節構造を持つ語では60%近くが平板型アクセントを示すという。

また、LLLL 型・HLL 型ほどは著しくないにせよ、LHL 型の音節構造からなる4 モーラ外来語においても、次の条件が備わる場合には平板型の出現率が比較的高くなることが知られている (窪田・太田1998)。

(22) 平板型生成条件 (LHL 型)

末尾軽音節が挿入母音/o/を含むこと。

一般に LHL 型外来語では次末重音節にアクセント核が現れやすいが (例: ポケ'ット, フル'ーツ, スラ'ンプ, ドラ'イブ), 上の条件を備えた語ではたしかに平板型が現れやすい傾向が認められる (例: ブランド, フライト, プレート)。この場合、語末に挿入母音/o/が位置することがなぜ平板型アクセントの出現を促進するのか、その理由は依然定かではない。しかし、この問題についてはひとまず措くこととし、それよりもここでは特殊モーラのタイプの違いと平板型アクセントとの関係に注目してみたい。

5.2 特殊モーラの種別と平板型アクセント

平板型アクセントを示す LHL 型外来語についてさらに詳細にその実態を探ってみると、重音節に含まれる特殊モーラの種類と平板型の出現率との間に無視できない相関があることに気づく。(23)の表は、NHK (1998) 所載の LHL

型外来語のアクセント型を調べ、重音節（H）に含まれる特殊モーラのタイプ別に平板型アクセントの出現率を整理したものである。

(23) 平板型出現率と特殊モーラ

	平板型	(全体)	割合	
/N/	40	(89)	45.0%	イベント, コマンド, スタンド, プリント
/J/	8	(33)	24.2%	ケロイド, スライド, フライト, プライド
/R/	18	(156)	11.5%	グレード, ディベート, ピロード, プレート
/Q/	0	(112)	0.0%	(なし)

この結果からは際立った事実が見てとれる。まず、重音節に撥音を含む外来語において顕著に平板型の出現率が高いことが分かる。その一方で、促音を含む語では逆に平板型が一切現れない。同じ子音性の特殊モーラでありながらも、撥音と促音とではアクセント型に及ぼす影響が全く正反対なのである。

加えて興味深いのは、(23)の結果に基づいて平板型出現率の高い順に特殊モーラを並べた場合、その序列が特殊モーラの安定度の序列(5)と完全に一致することである。

$$(24) \quad N(45.0\%) > J(24.2\%) > R(11.5\%) > Q(0.0\%)$$

この事実は、個々の特殊モーラの安定度の差異が、平板型アクセントの出現率に明らかな影響を与えていることを示唆している。すなわち、より安定度の高い特殊モーラが含まれる構造であるほど平板型の出現率が増し、反対に特殊モーラの安定度が下がるほど平板型が出にくくなっているのである。

それでは、安定度という特性はどのような形で平板型アクセントの生成に作用しているのだろうか。この問題について考える上で着目すべきは、やはり撥音含みの語において平板型出現率が顕著に高まるという事実であろう。試みに重音節に含まれる特殊モーラの種別（撥音：非撥音）とアクセント型（平板型：起伏型）との相関をめぐって独立性の検定を施すと、撥音含みの構造においては平板型が有意に多く現れるとの結果が得られる（ $\chi^2=64.4003$, $df=1$, $p<.01$ ）。この結果は、撥音には平板型アクセントの生成を有意に促進する構造特性が備わっていることを物語っている。

5.3 撥音の構造特性

撥音は固有の分節要素を常に付帯する点において、特殊モーラではありながらも一面では自立モーラと同等の性格を備えている。この点については複合外来語由来短縮語のパターンを通じて指摘したとおりである。撥音には、短縮の過程を通じて脱落を起こしにくい点で自立モーラとの相通性が見られる。実際、撥音や自立モーラを落とした(25)のような短縮パターンは見られない⁹⁾。

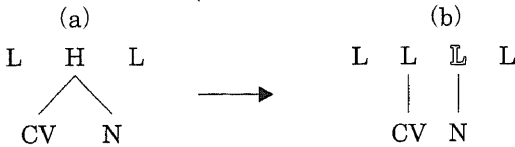
(25) 撥音と自立モーラ

ロ <u>ン</u> グ+バケーション	>	*ロバケ
マザ+コ <u>ン</u> プレックス	>	*マザコ
デ <u>ジ</u> タル+カメラ	>	*デカメ
デ <u>ジ</u> タル+カ <u>メ</u> ラ	>	*デジカ

撥音が自立モーラ相当の振る舞いを見せる現象は、このほかにもいくつか指摘できる。たとえば「梅, 馬, 旨い」など/um-/の連鎖で始まる語において、「ンメ(梅), シマ(馬), シマイ(旨い)」といった発音が一部の方言音声に観察されることがある。この場合、単に語頭の/u/が脱落するだけでなく、鼻子音[m]によって1モーラ分の長さが補償されている点に鑑みると、「ン」にはいわゆる成節子音としての働きがあることが分かる。つまり自立モーラ相当の音韻要素として1モーラ分の補償機能を発揮しているのである。あるいは、くだけた話し言葉において「んじゃ(それじゃ), んで(それで), んな(そんな)」といった形式が用いられることや、外来語地名の中に稀ながらも「ンジャメナ」(N' Djamena)といった撥音始まりの語形が見られるなど、撥音には他の特殊モーラには見られない自立的な振る舞いが少なくない。

このことは、LHL型外来語において撥音が平板型アクセントを招きやすいことと決して無関係ではない。撥音は特殊モーラの一員でありながらも、一方では自立モーラに比肩するほどの存在感を備えているがゆえに、アクセント形成の場面においても自立モーラ相当のステイタスを発揮していると考えられる。LHL型外来語のアクセント形成過程において、撥音は重音節Hの一部としてではなく、軽音節L相当の独立性の高いモーラとして扱われている可能性がある。このことは、撥音を含むLHL型外来語が、そのアクセント形成過程においてあたかもLLLL型の構造であるかのような扱いを受けていることを意味する。(L̥は擬似的な軽音節を示す。)¹⁰⁾

(26) 擬似軽音節



(21)で見たように、4モーラ外来語の中でもLLLL型は平板型アクセントの生成と極めて親和性の高いパターンである。アクセント形成の過程において撥音含みのLHL型外来語が(26b)のような構造解釈を受けやすいということは、それだけ平板型の生成につながる潜在的機会が増すことに等しい。すなわち、重音節Hに撥音を含む一群の外来語では、撥音が擬似的な軽音節 \bar{L} として振る舞いやすいがゆえに、アクセント形成の過程において平板型との親和性の高いLLLL型と同様の構造解釈を受けやすく、そのために平板型アクセントを特異に誘発しやすくなるものと考えられる。

6. 結 語

本稿では、特殊モーラの「安定度」というものが、従来主張されている聞こえ度の基準に加えて、特殊モーラの構造特性に基づいて定義できるものであることを論じ、次の諸点を明らかにした。

第一に、安定度の階層に基づいて特殊モーラが大きく二つの群(10)に分類できることを示し、固有分節の存否という点からこの分類の妥当性を検討した。撥音と二重母音は、特殊モーラの所在地である μ_2 節点に対して固有の分節が独占的に連結する点において、互いに特徴を共有している。他方、長音と促音では μ_2 節点を満たす固有の分節が存在せず、周辺の音韻要素から分節を借用する形でしか実体化が果たされない。

第二に、上述の構造特性の差異が、短縮語形成ならびに外来語アクセント形成といった韻律現象に深く関与していることを明らかにした。特に、短縮語での変則発生頻度およびLHL型外来語での平板型アクセントの生成頻度が、安定度階層(5)に従った序列を見せている点(18)(24)は、特殊モーラの安定度というものがこれらの現象に関与していることを如実に物語る事実として注目に値する。また、特殊モーラの中でもとりわけ撥音は、短縮の過程で脱落を来しにくいことやLHL型外来語で平板型アクセントを有意に生成しやすいなどの

点において、他の特殊モーラとは明らかに異なる特徴を見せる。こうした特異性からは、撥音が特殊モーラではありながらも、一面では自立モーラ相当の構造特性を備えた音韻要素であることが窺える。

付記

* 本稿は、科学研究費補助金若手研究 (B)「韻律語形成の適格性を制御する音韻特性の研究」(19720091) による研究の一部をまとめたものである。

注

1. 二重母音 (の副音) を特殊モーラとして認定するか否かについては必ずしも従来見解が一致しているわけではない。「非狭母音+狭母音」の連鎖を一律に二重母音構造と断定することはできない場合もある。ただし、本稿では「非狭母音+狭母音」構造が二重母音と見なせるケースがあるという事実を肯定的に捉え、二重母音が特殊モーラの一員であるとの立場から考察を進める。
2. 自立性階層の上位を母音性の要素が占める一方で下位を子音性の要素が占めると解釈できる点において、(1)の分類には合理性がある。
3. 代入エラーを取り上げた窪田 (1999) では、特殊モーラの「安定度」という概念の下で(2)に通じる分析が示されている。本稿ではこの点を詳しく取り上げる。
4. 促音 Q の位置については窪田 (1999) も明示的な形で述べているわけではないが、この階層の根拠として挙げられている言い間違い現象 (代入エラー) に促音が一切関与しないと指摘から、促音の安定度は最も低いレベルにあることが窺える。
5. 韻律構造と分節構造は骨格層 (skeletal slot) を介して別個の平面を構成する。この考え方は自律分節理論 (Autosegmental Theory) における音韻構造の三次元表示観 (Goldsmith 1979) を基礎としている。
6. /N/は便宜的な表示。厳密には [+consonantal, +sonorant] および [+nasal] の指定を受けた素性階層の根節点 (Root) に当たる。ただし、本稿では記述の便宜のために/N/という簡略表示をとる。
7. この場合、母音 V_j はそれに先行する音節核母音とは必ず音色の異なる母音 (典型的には狭母音) でなくてはならない。V_j が素性の集合体を意味することは/N/の場合と同様である。
8. 表(12)中の V[-hi] は非狭母音を、V[+hi] は狭母音を表す。
9. 自立モーラに関しては脱落例が皆無というわけではない。那須 (2008) は自立モーラを脱落させる短縮形が稀ながらあることを指摘している。たとえば「アコギ (アコースティック+ギター)、ラブホ (ラブ+ホテル)、ロイホ (ロイヤル+ホスト)、フルバ (フルーツ+バスケット、漫画作品名)」など。このような例には、あえて自立モーラを落とすことによって元の語の形を推測させにくくさせるといった言語外的要因が関わっているように思われる。つまりジャルゴン性を高める方途として自立モーラの脱落という異例のパターンが採られている可能性が考えられる。

10. 本来重音節の構成要素であったものが擬似的に軽音節相当の要素として振る舞うと考える視点は田中（2007, 2008）でも示されている。田中は促音を含む LHL 型外来語での -4 型アクセント（例：ト'リック, ス'リッパ, コ'ミック）について、促音含みの重音節 H が擬似的軽音節 Ⅱ として解釈されるとの分析を示している。一方、本稿では撥音含みの重音節 H が CV 部分と撥音部分とに分離してそれぞれ軽音節相当の構造をなすと考え。この点においても促音と撥音の性質の違いが指摘できる。撥音がそれ自体で独立の擬似軽音節をなすのに対し、促音はそれに先行する自立モーラとともに一つの擬似軽音節をなす。

参考文献

- 氏平 明 (1996)「歌唱に見る日本語の特殊モーラ」音韻論研究会編『音韻研究 - 理論と実践』71-76, 開拓社.
- NHK 放送文化研究所編 (1998)『NHK 日本語発音アクセント辞典 新版』日本放送出版協会.
- 上野善道 (1984)「地方アクセントの研究のために」『国文学解釈と鑑賞』49-7, 47-64.
- 窪蘭晴夫 (1992)「日本語のモーラ：その役割と特性」『日本語のモーラと音節構造に関する総合的研究(1)』（文部省科学研究費重点領域研究「日本語音声」E 10 班研究成果報告書）, 48-61.
- 窪蘭晴夫 (1999)「歌謡におけるモーラと音節」音声文法研究会編『文法と音声Ⅱ』241-260, くろしお出版.
- 窪蘭晴夫 (2000)「日本語の語彙と音節構造 - 「女王」は「じょう」か「じょう」か? -」『日本語研究』20, 1-18. (東京都立大学)
- 窪蘭晴夫 (2002)『新語はこうして作られる』岩波書店.
- 窪蘭晴夫・太田聡 (1998)『音韻構造とアクセント』研究社.
- 杉藤美代子・坂井康子 (1999)「「わらべうた」のリズムと音節」音声文法研究会編『文法と音声Ⅱ』291-306, くろしお出版.
- 助川泰彦・前川喜久雄・上原聡 (1999)「日本語長母音の短母音化現象をめぐる諸要因の実験音声学的研究と音声教育への示唆」アラム佐々木幸子編『言語学と日本語教育』81-94, くろしお出版.
- 田中真一 (1998)「フット内における母音のきこえと複合語アクセント」『音声研究』2-1, 50-62.
- 田中真一 (2000)「トリックとドリンクのアクセント構造」『長崎総合科学大学紀要』41-1, 29-44. (長崎総合科学大学)
- 田中真一 (2007)「日本語の音節量とソノリティー階層 - 外来語・複合語アクセントからの証拠 -」影山太郎編『レキシコンフォーラム 3』33-65, ひつじ書房.
- 田中真一 (2008)『リズム・アクセントの「ゆれ」と音韻・形態構造』くろしお出版.
- 那須昭夫 (2005)「複合外来語の短縮に見る特殊モーラの非対称性」『日本語・日本文化研究』15, 9-21. (大阪外国語大学)
- 那須昭夫 (2008)『複合外来語由来短縮語の音韻構造』第二回博報「ことばと文化・教育」助成研究報告.

- Goldsmith, John (1979) *Autosegmental Phonology*. Garland Press.
- Kubozono, Haruo (1985) "Speech Errors and Syllable Structure." *Linguistics and Philology* 6, 220-243.
- Kubozono, Haruo (1996) "Syllable and Accent in Japanese: Evidence from Loanword Accentuation." *The Bulletin of the Phonetic Society of Japan* (音声学会会報) 211, 71-82.
- Selkirk, Elisabeth (1984) "On the Major Class Features and Syllable Theory." Aronoff, M. and R. Oehrle (eds.) *Language Sound Structure*, 107-136, MIT Press.
- Vance, Timothy J. (1987) *An Introduction to Japanese Phonology*. State University of New York Press.